

韓国への三度の旅

解放後の韓国

おとなりの国、韓国の戦後の軌跡は日本とずいぶん違う。たしかに一九四五・八・一五は日本からの解放記念日であるが、半島はすぐに冷戦の論理で貫かれた。その後の三年間、三八度線を境に、南北別々の占領があった。しかも同じアメリカによる占領でも敗戦国日本のそれが周到に準備された成功した占領といわれるのに比して、韓国の占領は対ソ戦略のための犠牲、失敗した占領であった。独立したのは南も北も四八年のことである。

大韓民国は以来、大統領制を敷き李承晩時代をむかえる。それは自由主義陣営を選びながらも軍事独裁政権といわれ、海に李承晩ラインを敷いたように日本に敵しいものであった。五〇〜五三年には朝鮮戦争により悲惨な戦場体験をなめねばならなかった。この政権を倒したのは、六〇年四月九日の下からの学生革命であった。しかし、なお民主化は実現しない。今度は日本の陸軍士官学校出身の軍人、朴正熙による軍事クーデター

伊藤 彌彦

(大学法学部教授)

(六二年五月十六日)が続いた。以来、七九年十月二十六日の暗殺の日まで、軍とKCIAの恐怖のもと朴大統領の「開発独裁」政権が十八年間の長きにわたり国を支配したのであった。

青春の旅

さて今から四十年前、この韓国への最初の私の旅は、青春の旅であった。まだ民政移管以前の国家再建最高会議議長朴正熙時代の一九六三年七月二十九日から三十九日間、ワークキャンプ参加という偶然の機会をえて韓国を訪れることができた。当時私はICUの三年生だった。まだ日韓の国交はなく、SCIというフランス系のNPO団体およびクエーカー派のフレンズという組織を通じて、十二人の日本人大学生の訪韓ができた。その中には同志社大学の浅野みとしさんもいた。SCI(サービス・シビル・インターナショナル)という組織は、第一次大戦ですさんだ人心を国籍を超えた共同奉仕作業で回復しようと始められた運動で、日本支部の故佐藤博厚さんはインドのサル

ボダや運動の紹介など意欲的に活動を広げておられた。私は海外旅行したさに、にわか入会しての参加であった。

当時の韓国は本場に遠い国であった。日本人への渡航審査は厳しく、ビザが発給されたのは連絡船（四日毎に一隻のみ）が博多を出る二日前になっていた。はつきり思い出せないが新幹線のない時代の博多行きは、夜行列車での座り寝の長い旅であった。午後四時博多出航、翌日十二時釜山着。船は、山のように日本製品をかかえて里帰りする在日の人々であふれており、目立った土産品は釜山税関で無残にも接収されていた。

ワークキャンプは、さらに船を乗り継いで、全羅南道の小鹿島というハンセン病施設の島で行われた。それは遠浅の海を干拓して、ハンセン病が全快したのに社会復帰できない人の自活のための農地をつくる仕事であった。初めて目にした韓国の光景は驚くほど貧しく、とくに農村部の貧しさが目立っていた。主食不足が深刻だった。キャンプには、韓国の主要大学から百人ほどの学生が参加しており、日韓その他の同世代の男女青年百四十人が一カ月寝食をともにし、共に働き共によく歌いよく遊ぶキャンプは屈託ない交流を育んでいった。さしづめ青春そのものであった。

キャンプ終了後には軍用トラックに乗つての慶州観光があり、さらにソウルでは仲良くなったキャンパー宅にホームステイしながら、手厚いもてなしの観光がつづいた。ソウルの街にはまだ漢字の看板が掲げられ、終戦直後から二十年後までの日本が集約されたような光景をなしていた。中卒くらいの少女の車掌さんが満員バスを仕切る姿がけなげだった。当時、ほとん



一回目の訪韓。山を切り崩して海へ運び、農地をつくる。山の斜面で休憩中の筆者（左）。

どの韓国人にとつて私たちは戦後始めて出会う日本人であった。日本人と分かると何人もの見知らぬ人から日本に居る親族の行方調査を頼まれた。キャンプの終わりが、戦前を知っている年長のキャンプリーダーが、私たちをみていて「日本人は本当に変わったね」と感想をもらしたのでうれしかった。



1963年の韓国・南大門市場

今から考えると朴正熙政権はクーデター直後から、反日政策の是正を考えていたのではないか。この国際ワークキャンプも国土開発軍事委員会という組織が強力にバックアップして運営されていた。韓国ワークキャンプ協議会がSCI日本支部と国際ワークキャンプを組織する企画は六一年に始まっていた。朴

政権と日本政府との経済援助癒着は有名であるが、他方ではこのような民間交流の布石もなされていたのである。これも民間交流の一環と思われるが、六二年一月には交換学生として延世大学から、ICUに戦後初の韓国からの留学生が来た。その三人のうちの一人が朴忠錫さん（現梨花大学名誉教授）である。翌年にはソウル大学から金榮作さん（現国民大学教授）が来た。二十人の希望者から選考されたという。六五年には崔相龍さん（現高麗大学教授）が来日した。やがて私は東大大学院に進学したが、この三人も前後して東大大学院に進学し同じ政治学を専攻していたので、親しい友人となったのであった。日韓国交回復は六五年であった。

緊張の旅

二回目の訪韓は、一九七五年一月二十七日からの二泊三日、慌ただしい緊張の旅であった。私は同志社大学法学部の助手になったばかりであった。朴正熙政権は独裁と非難されながらも、穀物が底をつく春窮期にも餓死者を出さない経済開発政策とKCIA（秘密警察）の力で政権を維持していた。しかし次第に露骨な権力乱用が目立っていた。七二年の「十月維新」では国会を解散し永久執権を宣布した。七三年八月には野党の金大中大統領候補を東京のホテルから拉致して世界を驚かせた。あの六三年のワークキャンプ参加者の一人早川嘉春さんが留学先のソウルで逮捕される事件が起こったのもこのころであった。当然国の内外で朴政権批判、民主化運動も行われていた。

そのころ二期留学生だった金榮作さんはそのまま日本で就職しICU助教役になった。しかしある時ICU学術交流団の一員として訪韓した際、日本留学中の行動を理由に逮捕されてしまったのであった。その時の引率団長は、金榮作助教役を置いたまま脅えるようにそそくさと帰国したという。やがて政治犯として起訴された。大学院仲間や彼の先生たちの間でそつと救援活動が始まっていた。一回目公判を傍聴した大嶽秀夫君のあと、二回目は別人がいいということでノンポリ人間の私の訪韓となったのであった。今度の旅は空路金浦空港に着いた。ソウルの街は高いビルがならびすつかり様変わりしていた。あえてホテルを決めないで来たのだが、なぜかすぐに尾行がついていた。翌日の法廷では、私の姿をみとめて金榮作さんは驚きの声をあげ、「どこに就職したの。ICU?」「いや、同志社」「いい大学でよかったね。僕は元氣だから…もう二度と日本の方には会えないと思うのでよろしく…」等、看守のすきをついて単語を交わした。裁判を目撃すると東京で流されていた噂と違い、敬意をうけている政治犯であることも分かった。

その日の夕方、恐る恐るもう一人の留学生だった崔相龍さんに電話をいれてみた。すると意外にもすぐ会おうという（出発前どこからか、崔さんは日本人に会いたがらないという虚偽の噂が流されていた）。そして抱擁せんばかりの歓迎でお宅に泊まることになった。崔相龍さんもまた一時逮捕され、監視中の身であった。『世界』の編集長の名刺をもっていたことで、きつい拷問をうけていた。そのころの彼は失職し、いよいよ自宅を手放そうとして、その日も下見の人が来ていた。「今はオプ

ティミスティク・ニヒリズムに居直っている」といいながら、口を開けば昔のままの快活な崔さんであった。拷問の話、生活のこと、韓国の現状はまだ「自由」よりも「経済的平等」を求めていること、韓国を救うのは金大中であること等々、節約のため一部屋だけオンドルをいれている家で、一夜熱く語り明かし、翌朝は金榮作さんのご家族の手厚い送迎をうけ、無事帰国したのであった。

感無量の旅

そして三回目の訪韓は、昨年、二〇〇二年五月十七日から三泊四日の嬉しい旅であった。韓国政治思想学会主催の「西洋近代思想受容における韓・日比較」の日本側の報告者の一人としての訪韓であった。四半世紀ぶりの訪韓は、東洋一、二というハブ空港・仁川空港の快適さにまず圧倒された。ワールドカップの直前でもあり、高層ビルの立ち並ぶソウルの光景はさらに一変していた。諸大学の学園祭の時期でもあり、街は明るく、豊かでなごやかであった。この間に韓国の政治は劇的に変わっていた。民主化は本物となり、韓国の歴史はあきらかに進歩していた。社会も変わった。またまた下にも置かぬ歓待で李退溪の隠居していた陶山書院を案内していただいたが、その田舎の宿のトイレもピカピカの洋式になっていた。

三度目の韓国では二つの点で印象的であった。第一に、十七年前に訪韓したときに逮捕されたり、睨まれていた大学院時代の友人たちが、今や学界の長老格の中心として活躍していた



2002年5月、学会で報告する筆者（右から2番目）

ことである。シンポジウム開催の祝辞を述べたのがあの崔相龍さんだった。彼はその春、二年間の駐日韓国大使の任務を終えて高麗大学に戻ったところであった。「個人主義」部門の司会は戦後最初の来日留学生だった朴忠錫さん、「自由主義」部門の司会があの獄中にいた金榮作さんであった。前回の訪韓を想起すると、「いい時代になった」と感慨を禁じえなかった。

第二に印象的だったのは「個人主義」「自由主義」「民権主義」「社会主義」「進化論」をテーマにした討論が自由にできる国に

なったこと、そしてこの国では政治思想が生き延びていることである。日本側の飯田泰三、和田守、寺尾方孝、山泉進、五十嵐曉郎それに私にくらべ、韓国側の報告者は一世代若返っており、政治思想が社会を動かすという自信をもって学問をしている若々しさが漂っていた。恐らく昭和二十年代の日本の学会もこうであったのではなからうか。報告のなかには一八八一〜八三年に中村正直の同人社に留学していた「尹致昊の進化論」、おなじく慶応への留学生「俞吉潐の自由主義」、あるいは「韓国における福本イズム」という内容のものもあり、戦前から強い知的交流があったことを知るとともに、自分の隣国に対する無知を悟ったのであった。

ふりかえるとこの間、劇的に、韓国の政治が民主化路線に舵を切ったのは、盧泰愚大統領時代（八八〜九三年）であった。そしてついに一九九三年、金泳三政権が成立し民主主義という政治体制が定着した。一九九八年からは、一時はKCIAの手で日本海海底に葬られようとした金大中氏が大統領となっていた。この大統領は外国為替金融危機という難題を賢明に克服して政治家としての手腕をみせている。この間、韓国では民族主義が民主化運動と結び付いて進行した。そして着実に下から政治体制を民主化した。戦後五十年の韓国の歴史は激しい、そして実に力強い。これに比べ日本は戦後「天降る民主主義」を手にしたけれども、日本の民族主義の情熱は右翼と結び付き戦後民主主義を批判する勢力として存在している。民主化が進む韓国と右傾化が懸念される日本、日韓の政治体制の微妙な交錯が生まれようとしているのを心配する。